

自然と人間の共生関係が維持されてきました。

農業は、人間の生命の維持に欠くことができない食料を安定的に供給するとともに、農業生産活動を通じて国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、良好な景観の形成、文化の伝承等の多面的な機能を発揮するという特徴を有しています。しかしながら、近年、全国的に農業就業者数が減少するとともに、経験により培ってきた知識や技術を有する農業者の高齢化が進展しています（図1-2-4上段）。これに伴い、農業生産活動の停滞・後退や集落機能の低下が見られるとともに、耕作放棄地も拡大しており、特に、中山間地域などの傾斜の厳しい地域ほどその傾向が強く見られます（図1-2-5）。

また、林業は、森林の整備を通じ、木材を生産するとともに、地球温暖化の原因となる二酸化炭素の吸収・貯蔵や気温・湿度の調整を通じた気候の安定化、国土の保全、水源のかん養、生物多様性の保全など、人間の生存にとって欠くことのできない環境の基盤を育てています。しかしながら、国産材価格の低迷等による林業採算性の悪化、戦後のエネルギー革命による薪炭材の需要の低下などにより、森林所有者の施業意欲が低下して、農業生産活動が停滞しています。この結果、林業就業者については、高齢化が進むとともに、その数が大きく減少しています（図1-2-4下段）。また、森林では、更新、保育、間伐等の適正な手入れが十分に行われていない森林が一部で見られるようになっており、公益的機能の発揮への支障や、山村地域の経済や社会が停滞するおそれが生じています（図1-2-6）。

（2）里地里山地域における自然と人との関係の変化と生物多様性の危機

過疎化の進展、農林業の採算性の低下による農林業活動の停滞や生活・生産様式の変化等による二次林・草地の利用低下等により、適度な人為の働きかけによって形成・維持されてきた二次的な自然環境の質が変化し、こうした環境に特有の多様な生物が消失するなど、里地里山地域の生物多様性を含む自然環境への影響が懸念されています。

ア 水田

水田は、水管理や草刈りなど継続的な水稲作の営みなどの人為の働きによって、浅い水面を持つ湿地が形成・維持され、メダカやドジョウ等の淡水魚や、多様な昆虫や小動物の生息の場となっています。また、小水路から河川等へとつながる農村の水環境の中心として、水生動植物にとってなくてはならない環境を提供してきました。しかし、耕作放棄により水田が使われなくなると、水田が乾燥し、雑草が繁茂する結果、水田をすみかとするこれら水辺の生物の生息が困難になります。また、山間部の耕作放棄地にススキ、ヨシ等の多年生植物等が繁茂すると、イノシシ等の隠れ家として好適な環境となり、鳥獣害を招く場合があります。また、地下水のかん養機能が低下することにより、下流での湧水量が変化し、そこを生息の場とする生物への影響も考えられます。

図1-2-3 過疎地域における人口増減（社会増減と自然増減）の推移

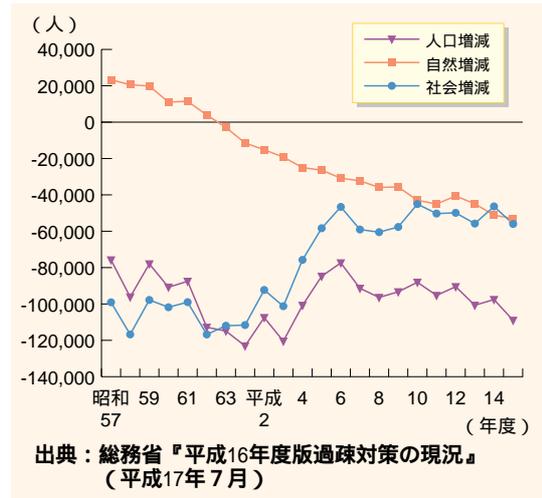
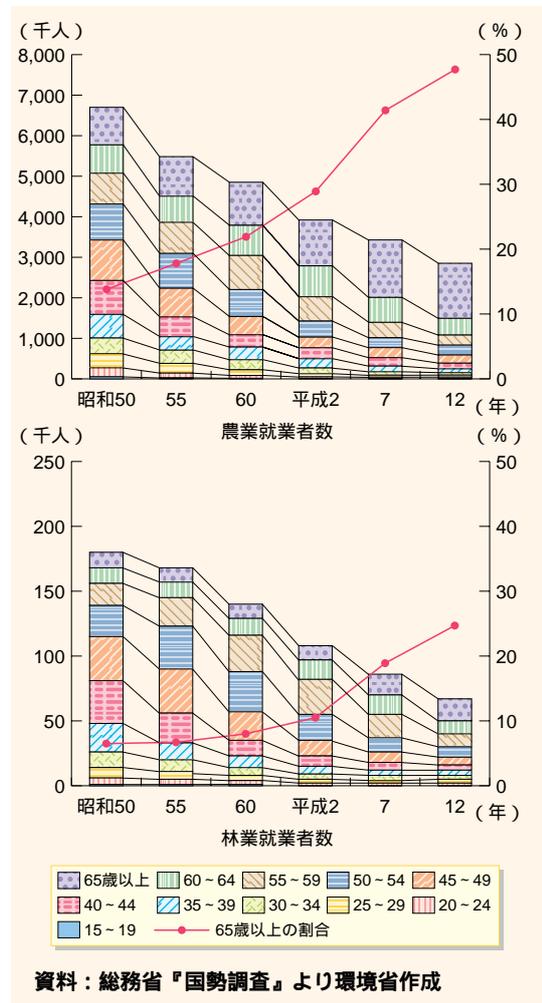


図1-2-4 年齢別農林業就業者数



イ ため池

利用されないため池は埋立等により減少しており、その自然環境を失いつつあります。

香川県を代表する景観ともなっているため池群は、本来の目的である農業用水の確保だけでなく、環境省レッドデータブックで絶滅危惧 A類に分類されるニッポンバラタナゴの生息地としてその重要性が認められ、「日本の重要湿地500」(2001年環境省)にも選定されています。香川県の実態調査によると、昭和61年に16,304か所あったため池が、平成12年には14,619か所に減少しており、減少したため池のほとんどは山間部にあり、農業用水として

図1-2-5 耕作放棄地面積の推移

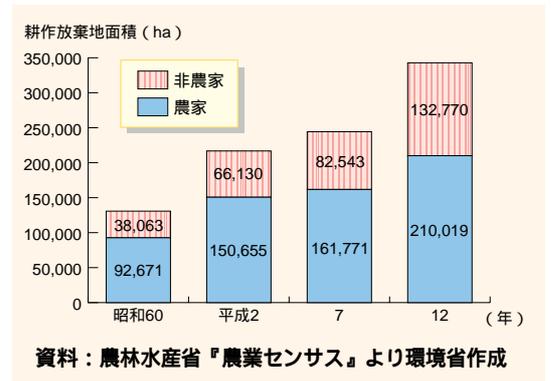
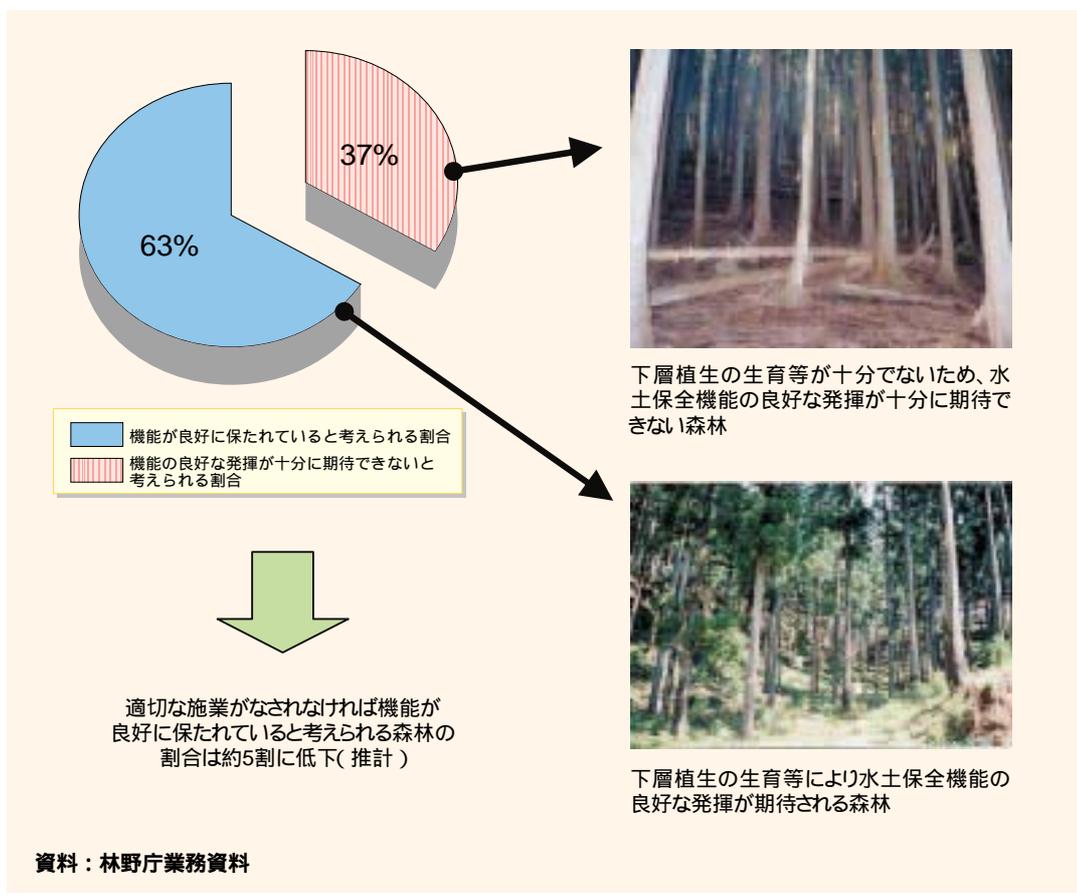


図1-2-6 育成途上の水土保持林のうち機能が良好に保たれていると考えられる森林の割合(平成15年度末)



耕作放棄地 (財)自然環境研究センター提供



荒廃山林 (財)自然環境研究センター提供